

ごあいさつ

「急逝」という言葉がありますが、妻・千代野は全くそれでした。

介護 20 年目（2016 年）の 12 月、いつものように手を引いて歩いていたら突然崩れるように倒れました。買物など外出時は必ず手を引いての毎日で、歩道につまずく場面はこの 20 年間たびたびあり、その手の感触が知っています。しかし今回は、私の支える力以上にあっという間に崩れました。偶然に目の前は定期健診受けている病院でした。ストレッチャーで運ばれ、ものの 30 分後蘇生の甲斐なく逝きました。

その 20 年前（1996 年）の 4 月、我が家で倒れていて、無酸素脳症の記憶意識障害者になったのも、私は数時間後に知りました。つまり、最初に倒れていた時も、今回崩れるように倒れた時も、当然ですが直前の覚悟、直前の夫婦の会話はありません。何の前触れなく精神障害者になり、何の前触れなく天国に逝ってしまったのです。ここが最後まで会話ができる闘病者介護と違う点です。結婚して 22 年間の健常時と、本性探るのは難しい 20 年間の精神障害時、彼女は私に、私は彼女に何を語り、何を思っていたのか、二回の突然はわかる術がありません。

それまで毎日の洗濯物の大半は通所施設からの彼女の物でした。数枚の私のそれを干しながら空を見上げ「ああ～、独りになってしまった」と思いました。つぎに思ったのは、同じ「独り身」境遇の人がもっといるのではないか？でした。地元紙にその心境を投稿しました。多くの反響は「独り」ではない事を知りました。ならば集おうと思いました。各紙がその事を報道してくれました。

会名称は、抽象的でなく名は体を表す物、現状を克服し前に進むもうと言う意味で、「腑抜け NO 会」にしました。（当然、変な低俗な名前との声もありました。）

伴侶を亡くした悲しみ苦しみは千差万別の様に、集う人々も様々な思いを携えてきます。同じ悩みを語り合いたい、癒しを得たい、あるいは婚活も考えたい